

# 令和2年度病害虫発生予察情報 発生予報第3号(6月)

令和2年6月29日  
発表：福島県病害虫防除所

## 1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	やや少ない	天候予報(6月18日発表1か月予報)によると、向こう1か月の天気は平年に比べ曇りや雨の日が少ないと予想されている(－)。	①補植用置苗は直ちに処分する。 ②発生 of 早期発見、早期防除に努める。 ③長雨の場合や常発地では、適期防除に努める。 ④気温が低く、降水量が多く推移した場合には発生が多くなるため注意する。
	紋枯病	全 域	平年並	やや多い	①降水量はほぼ平年並と予想されている(±)。 ②前年の発生ほ場割合は平年より高かった(+)	①前年発生の見られたほ場では今後の発生状況に注意する。 ②窒素肥料の多用を避ける。 ③薬剤を散布する場合は、穂ばらみ期に実施する。 ④気温が高いと上位葉鞘への伸展が早いため、注意する。
	イナゴ類	全 域	－	平年並	6月下旬の幼虫の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	発生が目立つ場合は、7月上旬までに薬剤防除を行う。
	斑点米カメムシ類	全 域	－	やや多い	6月下旬の畦畔雑草すくい取り調査によると、斑点米カメムシ類の発生地点割合が平年よりやや高かった(+)	畦畔や水田周辺のイネ科雑草の穂は斑点米カメムシ類の増殖源になるので、草刈りを励行し出穂10日前頃までに終了させる。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

## 2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	やや少ない	新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	
	褐斑病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	梅雨時期に散布間隔を空けず薬剤散布を実施する。
	<b>黒星病</b>	中通り <b>会津</b>	— —	平年並 <b>やや多い</b>	新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年同様発生が確認されなかったが（±）、 <b>会津ではやや高く、果実でも発生が見られた（＋）。</b>	<b>①発病部位は徹底して除去し、園外に持ち出して適切に処分する。</b> <b>②薬剤散布は散布ムラがないように丁寧に実施する。</b>
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	
モモ	灰星病	中通り	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	
	<b>せん孔細菌病</b>	中通り	—	<b>多い</b>	<b>①新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高く、発病葉率の高いほ場も見られた（＋）。</b> <b>②果実での発生ほ場割合は平年より高かった（＋）。</b>	<b>①再度園地を見回り、罹病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。</b> <b>②薬剤散布は降雨前の実施を基本とし、散布間隔が空きすぎないように実施する。早生～晩生種の混植園では特に収穫前日数に十分注意する。（防除情報参照）</b>
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	園地を見回り、幼虫発生初期に薬剤散布を実施する。
ナシ	<b>黒星病</b>	<b>全域</b>	<b>—</b>	<b>やや多い</b>	<b>①新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。</b> <b>②果実での発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。</b>	<b>①園内をよく見回り、罹病部位の早期発見・早期除去を徹底する。</b> <b>②薬剤散布は散布間隔が空きすぎないように実施するとともに、天候に留意して降雨前に行う。</b> <b>（注意報3号参照）</b>

果樹共通 (中通り: リンゴ、 モモ、ナ シ 会津: リンゴ 浜通り: ナシ)	カメムシ類	全域	—	多い	6月2半旬、3半旬のフェロモントラップ調査の誘殺数が、複数の地点で例年より多かった(+)。	園地での飛来状況をよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤散布を実施する。 (注意報4号参照)
	アブラムシ類	全域	—	平年並	新梢寄生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢寄生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。

**◎夏季せん定等の新梢管理により、通風・採光を良好にし、薬液がよくかかるように心がけましょう。**

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	①多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。 ②葉かび病抵抗性(cf-9)品種でも発病するレースが確認されているので注意する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	①ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ②施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意すること。
	コナジラミ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	①ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ②ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	蔓延すると防除が困難なので、発生初期から防除を実施する。

夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	蔓延すると防除が困難なので、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①低密度時から防除を徹底する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（+）。	①多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 ②品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①低密度時から防除を実施する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（+）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（-）。	中位葉以上での発生に注意し、低密度時から防除を徹底する。
リンドウ ※過去5年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、例年よりやや高かった（+）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年よりやや高く（+）、一部で被害程度の高いほ場が見られた。	7月上旬中に成虫の発生が予想されるので、ほ場をよく観察し、防除を徹底する。
野菜・花き共通	タバコガ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった。	生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

<p>夏秋トマト（被覆栽培）</p>	<p><b>■トマトかいよう病</b></p> <p>本病は細菌病であり、種子や土壌中の病原菌が第一次伝染源となり、その後、<b>芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します</b>。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では、発生リスクが高いため特に注意してください。</p>
<p>野菜・花き共通</p>	<p><b>■ウイルス病（アブラムシ類、アザミウマ類媒介による）</b></p> <p>アザミウマ類が媒介するトマト黄化えそウイルス（TSWV）の発生をトマトで確認しています。また、アブラムシ類が媒介するキュウリモザイクウイルス（CMV）等の各種ウイルス病の発生が懸念されます。ウイルスの感染を防止するため、媒介昆虫であるアブラムシ類やアザミウマ類の発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV 及び ZYMV 等のウイルスの重複感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p>